

【コラム】

わが人生の支流 ―観光産業への関心―

松下 忠義

Side Stream of my Life:
The Interests in Tourism Industry

MATSUSHITA, Tadayoshi

I

この 1 月で満 79 才、「思えば遠くへ来たもんだ…」、若い頃に年令を特定したわけでないけれど、この高令まで若い頃に近い状態で行動し、考えたり出来ることを確かに感謝したくなります。親に、自分に、まわりの友人に…。

定年後には、音楽バンドや NPO の活動、京都大学の院ゼミに同席させてもらう。好きなように振る舞える毎日、2 人の子息と 4 人の孫たち、それぞれに旅立ち、妻と二人の生活。企業に勤務した現役時代、商社での海外勤務、22 年連続でアメリカ在住、3 つの子会社の事業経営、栄光と挫折の中で、「脱日本」を目指した若い頃の夢は達成できたと思います。

以上が私の本流（メインストリーム）とすると、実は今に至る 66 年間の支流（サイドストリーム）がつれ添っていたのです。そのサイドストリームとは？ 66 年前の中 2 の夏休みにまとめた論文がありました。

「観光資源と日本再建」 1950 年 8 月

原稿用紙 100 枚超で、父が堅紙で表紙を作って千枚通しの錐（キリ）で穴を開けて黒ひもを通して製本してくれました。出来上がった時の達成感は、今も忘れずに思い出します。

中学校から夏休み自由課題の金賞をもらいました。ごほうびに担当の社会科の先生から、2 時限を「アフリカの民族文化」について先生にかわって講義するように云われました。当時はコピー機もなくアフリカの地図や珍しい民族の衣裳や舞踊を画用紙に書いて回しました。

さて、「観光資源と日本再建」は、何を訴えたのか？ 1950 年当時の日本に世界へオファーする案件は、観光資源しかない？ 先行投資も余り要らない、ありのままの日本の風景など世界に知らしめて世界の観光客を誘致しよう、おカネを落としてもらって日本再建へ循環させようと言う主旨。中 2 のアタマでなら出て来る単純な発想、「論文」とは云えない稚拙なものでした。しかしこの発想はすんなり出来上がり、苦労もなく「論文」に仕上がりました。

参考文献は、『日本風景論』（志賀重昂著、1895 年刊）と三省堂の『日本の国立公園のはなし』（1948 年刊）。

『日本風景論』は、地理学者：志賀重昂（1863～1927）が、日本の風土がいかに欧米に

くらべて優れているかを情熱的な文章で綴ったもの、古文体と一部は漢文でした。豊富な挿絵も。中2の私には通読する力量はなく、もう一冊の『日本の国立公園のはなし』から当時に制定されていた国立公園群の情報*を「風景論」にかぶせて、各国立公園の説明を削った上で、それぞれがどのポイントで世界に宣伝できるかを論述しました。

* 当時の国立公園（ ）は制定年度

阿寒（1934）、大雪山（1934）、十和田（1936）、日光（1934）、上信越高原（1949）、富士箱根（1936）、中部山岳（1934）、吉野熊野（1936）、瀬戸内海（1934）、大山（1963）、雲仙（1934）、阿蘇（1934）、霧島（1934）の13国立公園

現在合計32の国立公園が制定されている。

私の「観光資源と日本再建」は、2つのメリットを産みました。1つは難解な本でも慣れ親しんでいると、内容が徐々にわかって来ること、もう1つは個々の国立公園の細目を知ること、人文地理に異常に興味を持つことになり、高校や大学の入試で無敵の力を発揮できました。また国立公園のオタクになって「国立…」の文字を見れば、「国立公園」と連想するほどになっていました。

私の中2、つまり1950年から今に至る66年間、国立公園を中心に日本の観光産業のことがアタマに去来し続けて、人生のサイドストリームを形づくることになりました。

これは、趣味というには軽すぎず、関心というには狭過ぎず、魅力一杯でアタマを専有しようとする迫力があります。私の生涯学習のひとつのパターンでしょうか。

II

私の観光産業サイドストリームに関して、2つ言及したいと思います。アメリカの国立公園についてと、2人の知人についてです。

○ アメリカの国立公園

世界の国立公園の歴史はアメリカのイエローストーン国立公園（Yellowstone National Park）1872年に始まる。ワイオミング（Wyoming）州の西北端に四国に近い面積を有していて最後にアメリカをまわった2012年には、ここだけに3泊4日を費やした。レンタカーでドライブ時間が足りない。国立公園のメッカ。1872年の2年前にワッシュボーン探検隊がこの原始地域にわけ入った。日本は明治5年、太陽暦採択や新橋―横浜間鉄道敷設。日米の歴史較差あり。

アメリカで国立公園がすんなり出来たわけでない。イエローストーン国立公園などの設立に関わったジョン・ミューア（John Muir）の書簡集（全912p）を拾い読みしても政治のかけひきや環境保護での確執は尋常でない。

22年間の滞米生活で休暇では、ドライブして走りまわった。家族帯同。大半の国立公園は踏破した。最大のトピックスはイエローストーン国立公園で夕刻薄暮のころ、訪問者たちの間を中型犬が一匹小走りで行った。「WOLF（オオカミ）だ」と云う声が上がって思わずシャッターを切った。私はCOYOTE（コヨーテ）でないかと思ったが、複数頭でなかった。WOLFは人に危害を与えるとして1920年代に撲滅したがバイソンやヘラジカが増え過ぎてバランスが崩れた。カナダからWOLFを移住させていて。今はWOLFが食物連鎖のトップに君臨している。あの中型犬がWOLFであってほしい。千載一遇のチャンスだったので。

○ 知人たち

成田研一氏 NPO 活動の中で偶然に知り合った。日本の国立公園とともに歩まれたパークレンジャーの経験者であり国立公園の生き字引きである。いま NPO 法人「環境文明 21」の関西グループで執行トリオとして活動中。いつでも豊富な知識をもらえる。76 歳。

西田正憲氏 奈良県立大学の副学長。65 歳。風景論の研究者。国立公園についてアカデミックなアプローチができる。『国立公園変遷史』の出版近し。折に触れコンタクトできる。

Ⅲ

1950 年「観光資源と日本再建」から 66 年、その間論文を書くチャンスがなかった。京都大学法学部では今も卒論なし、企業人になってもなかった。1950 年中 2 の論文でとても論文といえない稚拙なもの、しかし思い出はここに遡ります。

1950 年の日本は占領下、朝鮮戦争勃発後すぐ、所得倍增計画は 1960 年、沖縄返還が 1969 年、だから八方塞がりだった。その後はものづくり日本、JAPAN AS NO.1、バブル崩壊、低迷の 20 年、安保法制の急展開、テロと防戦のはてしない抗争。

一方観光産業も大きく広がり変っていきました。観光資源と云えば国立公園しかなかったが、国立公園が 13 から 32 に増え、国立公園、自然公園の拡充、そして世界遺産が急速に台頭して来ました。世界遺産は全世界で 1007 件、うち日本で 19 件登録されています。

(1972 年ユネスコで採択された世界遺産条約による。)和食が無形遺産に登録されるなど、単に景観の分野から文化そのものにも拡がりを見せていて、今や日本の観光立国論は実に華やかであります。

私は、日本の国立公園を訪問し、小笠原国立公園を除いて全部体験しました。常に多くの訪問者が増えるにはどうすればいいか考え続けて来ましたが、昨今のインバウンド(海外からの旅行者)の激増は目を見張る社会現象とまでなりました。

二人のエコノミストが観光立国をテーマに出版、同名の書名、同じ月に刊行。『新観光立国論』2015 年 6 月刊。

デービッド・アトキンソン著 東洋経済

寺島実郎著 NHK 出版

2 年前にインバウンド 1,000 万人を語ったのが、2015 年は 2,000 万人を突破したようです。

大変なジャーナリスティックな話題になっていて、次は 3,000 万人とか 5,000 万人とか語っていますが、日本の観光資源がそれぞれにどう活性化され、どうインバウンドの客たちに喜んでもらいリピーターをクリエートしていくのか、根本部分の十分な検討・研究に至っていない現状を憂います。

私の国立公園と観光資源をめぐるかわりは続きます。人生の支流(サイドストリーム)は消えることはありません。力強くはないが、折あれば発信して、観光立国の下支えに努めたいと思います。

人生の本流(メインストリーム)と支流(サイドストリーム)と…。健康でいるかぎりこの複線流に乗って納得の人生を送りたいものです。